

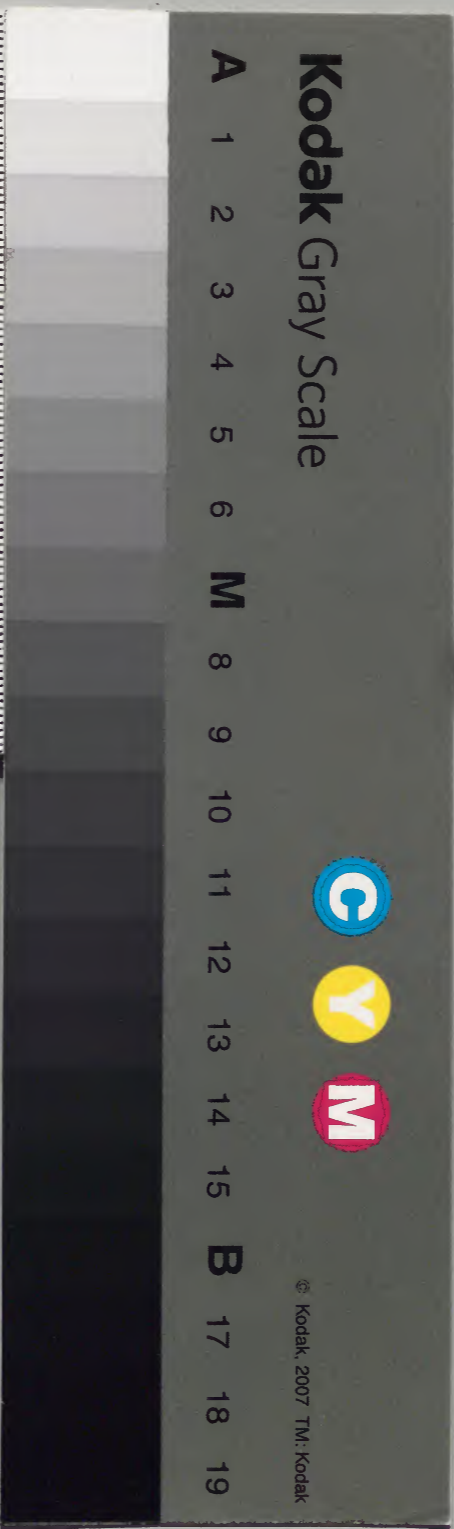
日本書紀傳

十四卷 固

和書
一〇五二二號

三十三

内閣文庫	
番號	和 10522
冊數	156 (42)
函號	特 85 1



文政
印

圖書
印

圖書
印

内一六八三

上光高天原下光葦原中國之神於是云々故專汝往
 將問者吾御子爲天降之道誰如此而居云々所以出居
 者云々と有る此三の居字の用ひ様甚近くて意得易
 一又神武天皇御紀道臣命歌小於佐箇迺於明務露夜
 珥比苔瑳破而異離烏利苔苔苔毛比佐破而积伊離烏利苔毛
 云々と有る烏利と住著て有るを云はず其座所を占て
 居るを云ふなり然れバ住の住所小就て云ふ對小居ハ
 座所小就て云々者ありけり若て其を合せて住居と
 の上ありハ其義も異あり故小混ひも無き事ハハ
 有れども其言の上ありハ何れを其と差別無か如き
 故小合せ
 説く者あり

○日本書紀傳十四

○百十八

ナリエのミナカニ
生禪腹中

是後天照太神復遣天熊人
往看之是時保食神實已死
矣唯其神之頂化為牛馬麁
上生粟眉上生蠶眼中生稻
陰生麥及大豆小豆天熊人

悉取持去而奉進之于時天
照太神喜之曰是物者則顯
見蒼生可而活之也乃以粟
稗麥豆為陸田種子以稻為
水田種子又因定天色君即

以其稻種始殖于天狹田及
長田其秋垂類八握莫莫然
甚快也又口裏含鹽使得抽
絲自此始有養蠶之道焉保
食神此云宇氣母知能加微

顯見艾君生此云宇都志枳阿
烏比等久佐

是後ハ其復命一給ヘテ即汝ハ惡神あり相見よく須
せずと其より宮室を隔離て令住給ヘテあざり大御
政訖て儲再度の大御使を天降し給ふ可らめぬバ少
クハ其間合を隔たるあざり可一御紀の例其所ありて直
小在るを是時ノ記され少少も猶豫有るを于時ノ書
され其事小指次あざり其間合有るを是後ノ書ヨリ其事

を訖りて事の改^改時ハ然後と記されたり心を著
て視べし○天照太神此ハ皇產靈神の御事を漏し
奉りたりハ古事記ハ故是神產巢日御祖命令取
茲成種と有て天照太神の御事を漏し奉りたり然
ハ高天原ハ於て物爲させ給ふ天津神量の御事ハ
ハ何時も皇太神を主宰として皇產靈神ハハ必
預奉りせ給ふ御事あり故ハ或ハ並載りれ或ハ何れ
ハ其片方を以て記し奉る古書の例ありを思ふ可し
其ハ皇御孫尊の御天降の神量の御事を天孫降臨章
ハハ高皇產靈尊一柱の御名耳を記し奉りれ其第一

一書ハ唯天照太神と耳有り其第二一書ハ天照
太神と高皇產靈尊を更ニハ載奉るを以知べし者ハ
ハ祝詞ハ何時も高天原ハ神留坐皇親神漏岐神漏
美乃命以^云云と見え出雲神賀詞ハ高天能神
王高御魂神魂命乃云と有て此ハ皇太神の大御名を漏し奉りれも同し然れども皇太
神御一己ハ係りせ給ふ御事ハ皇產靈尊此ハ抱
りせ奉給ふ御事無し瑞珠盟約章あり素戔嗚尊ハ
御誓して御子を生奉りせ給へる寶鏡開始章あり素
戔嗚尊の御荒びハ依て天石窟ハ幽居^{カケリマシ}ハ是あり
然れども八百萬神と共ハ議給ふハ必其皇產靈神
此ハ係列りせ給へる古語拾遺天石窟段ハ高皇產靈

神會八十万神於天八湍河原議奉謝之方々有る是ふ
カ又此小准へて其高皇產靈尊神皇產靈尊の御一
己の御事小至りてハ天照太神の預り奉りせ御在
し坐す限小非々御事あり故此ハ天照太神高皇產靈
尊神皇產靈尊の高天原小神留坐て相共小神議小議
給ふ初ありて其ハ天照太神と素戔嗚尊と二柱の御
誓の御間小天忍穗耳尊の生出させ御在し坐しりバ
其二柱の珍御子小渡りせ御在し坐す隨小天降り奉
りせ給ひて此頭國を所知し令坐奉りせ給ふ可り大
御心の御在し坐ガ故小先ハ皇太神の大御使より
て其素戔嗚尊を天降り奉りせ給へるも其國小在由

頭見蒼生を令治給はむハ先其食て活べそ物を
定置せさせ給はむりて其保食神の其飯を盛り膳
厨の處を爲て其御徳を成し給ふ消息を令伺給へり
いりども其素戔嗚尊イカリオモヘテリ忿然作色て事有けり故小其事
竟さず御在し坐しりバ再度の御使を指下し給ふ小
就て皇產靈神も神議りて共小行りせ給へるハ其
保食神の御身より成出たる瑞穂を以て皇御孫尊小
天津日繼所知し令坐め奉りせ給ふ可り御心構の御
在し坐小就てあり然れば此ハ天孫降臨章小條小
所見たりけり天津御量の原小あり有けり但此ハ右
小云り如

御
今古事記御天降段ハ
天照太神神命以豊
葦原之十秋之長五
百秋之水穗國者我
御子正勝吾勝速
日天忍穗耳命所知
國言因賜而天降也
云ハ高皇產靈日
神天照太神神命以
依り初小國名も水穗
依り初小國名も水穗
合す可くあり

と思ふ踐祚大
 嘗會式御膳八
 神の中高御魂
 の御名御在一坐
 て神神の御名
 の見えつせ給
 らる各三神共相
 係列ハセ給へる事
 あり故あり

く古事記を合せて説を成せるあり何れかして御
 一方の御議と見てハ其幽深ヨ致あむ見ゆまどり
 け ○天熊人ハ山蔭小人の上ハ大字有ハ本宣ハ但三
 熊之大人齋之大人あど大人小ハ之字有ハ例あ水バ
 此ハ天熊之大人と有ベリやと云れたハ舊事紀の
 古本此も天熊人次ありハ天熊大人と作ハ御紀ハ然ハ本の有つ
 を取て書ハ者あり可延佳本ハ熊下有大字異本作
 ハ天熊人を天熊大人と云得知ぬ僻心あり中
 考ハ可き所ハ熊ハ借字あり美稻ウミネを云ハ古言ハ
 や有ハ倭姫命世記ハ二十七年戊午秋九月鳥鳴聲高
 聞五晝夜不止止驚此異止宣五大幡主命舍人紀麻呂良

止差使遣令見彼鳥鳴處罷行見波嶋國伊雜方上葦原
 中有稻一基生本波一基ハ為五末波千穗茂也彼稻白
 眞名鶴咋持迴乍鳴支云ハ爾時倭姫命宣久恐志事不
 問奴鳥須田作皇太神奉物并詔五物忌始給五彼稻伊
 佐波登美神并為五拔穂ハ令拔五皇太神御前懸久眞
 尔懸奉始支則其穗大幡主女子乙姫ハ清酒令作御饌
 奉始支千稅奉始事因茲也ハ有ハ懸久眞ハ懸稻ハ
 神嘗祭詞ハ懸稅ハ見九ハ是ハ皇太神宮儀式帳
 ハ久麻良比神社一處祢大歳神兒千依比賣命云ハ
 見九ハ久麻ハ稻良ハ助辞比ハ飯ハ可くハ其

大九 歳神と申すハ農作の神少て御在り坐れバ其御兒十
依比賣命の千ハ税ナカの略少て税依比賣命此田相を専奉る詔ありむり所
思由傳北六五ノコナリしク也亦思合す可一故右ハ稻を久麻云事二
證有又和名枚郷名ハ石見國邑智郡神稻久末有リ
神名式ハ那賀郡大飯彦命神社大歳神社有を思合す
可一淡路國三原郡神稻久萬ハ豐受大神の御靈の初
て天降坐一鎮坐々地其傍ハ在れバ思合す可一あり
然れバ神稻ハ義を以て書々少て言ハ稻實ノミあり然々
を肥前國高來郡神代加無也本ハ神稻ノミと同一訓あり
けむを字ハ依て加無とハ訓誤れり一者あり可一和

名枚祭祀具ハ釋米釋和名久萬之祢精米所以享神也と
有れバ美稻ウミハ近ク言あり故思ふハ古事記天御饗段
ハ天之直魚咋ウミ云事有り其魚を取除れバ真咋ウミ少て
味咋ウミと云むカ如一其を倒反ハ為れバ咋味ウミあり世中
ハ食と咋ハ物ハも多ク有れども其有カ中ハ美味
ク物ハ稻あり故ハ久麻ハ云ありけり天熊人ハ御
使して奉れ物ノ多ク中ハ其主ハ有ク物ハ就て
仰給へク名あり天熊人ハ天稻人ハ云ハ異ありハ不
ハ口訣ハ天熊人雲以名之ハ有ハ音の通へク故ハ
云々あり據ハ無キ事あり然ハを万葉二十ハ美蕪
良由久ハ母ハ都ハ可比等比等波伊倍信等伊幣頭刀夜良
武多豆伎之良受母ハ有ク引ク通證ハ今按三代實録

平群郡熊凝寺延喜式作平群郡雲甘寺と云證せれど
必天熊人ハ雲の義ハ非事右小云カ如右の
釋米を新嶽樂記ハ熊米と有け故其月夜見尊の大御
使とて出坐し後ハ復被遣たる神ハ坐せハ其天熊
大人も並この神ハ御在し坐し必貴き列の神ハ御
在す可きあり故思ふハ天孫降臨章ハ所見たる天穗
日命の御子大背飯三熊之大人亦名武三熊之大人と
見えたる其神ハ天熊人ハ有む然ハ其御父天穗
日命と申す御名も稻穀ハ依て天穗飯命と申す義ハ
聞え此神ハ天熊人と申すハ天稻人あり事右小云
如くあれハ三熊ハ真稻の義あり事云も更あり若て

大背飯と其上小冠ありせれハ字の如く飯を背負
ひて天小持去給へり少て次ハ見えたる諸の種子の
事を云あり古小物を持ハ地月小負持つ事常あり故
古事記ハ背負日と有り同書ハ於大元年遲神負袋爲
後者率往と見えたるを雄略天皇十四年御紀ハ負囊
と云事ハ有然れハ大背飯三熊之大人と申すハ其
保食神の御身あり成出づ種々の種子を天上ハ負
き持去て復命し給ふ其功ハ依て負ハ神名ハあり有
けハ三熊大人と申すハ真稻之大人あり其穀物の有
中ハ主と有る美稻を以て號とハ成れりけむ事亦
右小云カ如くあり天穗日命と申すも天穗飯命の

義と聞ゆれば其神ハ天降リ御在リ坐ガリつれども
其御子武三熊之大人を降リ奉ルヨリ始テ上天ハ持
太テ後亦も其同ト事ハ係ル御功共の有けるハ依
テ負給ヘテ御名ある可キ事云も更あり借此稻穂ハ
天津日継の瑞穂あり其を天照太神ヨリ受奉ルセ給
ひテ日継の御子ト定ムルセ給ヘテ珍御子を天忍穂
耳尊ト申奉ルルハ大穂着身ト申テ義あり事傳十五
卷ハ註ヲを見て知べく又天津日継ト定ムリ坐テ天
降ルセ奉ルセ給フ時ハ此顯國の國體見ハ先天穂
日命次ハ其子武三熊之大人を天降リ給ヘテあじ

も皆其起原ハ此保食神の一段ハ在を古ヨリ今
ハ至リテ人の得知ガるところ氣疎キ事ありけれ右ハ
如ク此天熊人を天降リ遣ハ給ヘテハ全ク皇大
神ト皇産靈神トの御量ありテ天孫降臨章ありト同ト
趣ありハ心を著ベリ然レバ此ハ一書の列ハ加ハ
リテ有レども天石窟の事ト御天降の事トの基を成
セテ甚コ止事無キ
傳説ハあり有ける
○遣ハ都加波志氏ト訓ベキ事傳
百七十
一
下
ハ云リ復遣ト云事ハ遷却崇神詞ハ次遣
志
云ハハ並べて又遣
志
云ハハ是あり然レども
此ハ復天熊人宇遣而ト訓テ有ベキあり○往者之ハ
上あり就候之ト同ト事ありども訓ハ往者者世給
布ト有リ其宣一往テ令見給ヘテあねハあり然ルハ

月夜見尊も御使少て降坐しハ有れども皇太神の
御兄弟小御在し坐て甚く重く渡りせ給へれバ直小
見給ふと令見給ふとの差別を立て訓者と見えたり
万葉六小遣西海道節度使時の歌小五百障山伊太
割見賊守筑紫尔至山乃曾伎野之衣寸見世常伴部
半班遣之有見世ハ○實ハ上小月夜見尊の復命
具言其事と見えたり其事小應へて云ふあり瑞珠盟
約章第二一書小汝言虚實將何以爲驗寶鏡開始章第
三一書小故實以清心復上來耳天孫降臨章小皇孫未
之信曰云々如實天孫之胤火不能害其第二一書小是
ハリエトオホキ
實天孫之子者必當全生第六一書小母折言已驗方知實

是皇孫之胤あど多く古事記肥河段小其ハ候遠言智
信如言來玉垣宮段小因拜此大神誠有驗者云云と見
え万葉三十四下小如聞真貴久奇母云々あども有て實
と虚と又信と偽と相反りて對ふ語少く言小云事
小云も共小麻ハ身ハ虚ハ身無ハ身是あり然れ
の言語ふ小實の有る無くと云諺の有も其身を云ふ
ハ但此小身と云ハ云此其身体小限らず其實の有
を然云ハ○已死矣ハ上小技劔擊殺と見え古事記小乃
殺其大宣都比賣神故所殺神云云と有れバ實ハ身亡
給へるガ如し然れども攝津風土記小有事不可得已
還於丹波國比遲乃麻太草と云ふ明文慥小在る上ハ

其殺云ハ誤あり事已ハ上百三ハ云々ガ如ク然ル
バ此ハ死字を作ルモ固ヨリ僻事あり事云モ更アリ
但其麻加禮理ハ死字ハ當ル訓ハ有レドモ亦
罷字ハ受張タル訓ありバ死字を姑くハ罷字ト見て説を成
す可ク貴已罷兵ハ其稻椋山を以て爲膳厨之處ト云
ル其ヨリ丹波國の本貫モトツカドハ還ル御在レ坐レを云アリ
けリ借其稻倉山ハ若クハ皇祖天神を祭ルセ給
ふ處あり故ハ素戔嗚尊を其處ありて饗食應レ奉ルセ
給ふあり可ければ保食神の御爲ハ齋庭とも謂フ
可キ處あり記傳七二十ハ罷トハ貴所ヨリ退去ルを
六丁

云故ハ去ル所を尊ニ趣ク方を昇レむル時ハ云言ハ
カト有ルハ叶ヘバあり罷の意ハ瑞珠盟約章あり
就字の下ハ説ベク借此ハ古事記も共ハ殺サレ給ヒ
説ハ如何カ思ハ人モ有レドモ己ハ紀記共ハ
伊弉册尊をすルハ萌御リ坐ル趣ハ書サレタルを鎮
火祭詞ハ依テ正レ辨ルルと同トリ可ク其ハ古書
此モ古書ありバ事實ハ合せて理の正レサレ就クを
何の憚ル事然レバ此下ハ擧タル種ノ物ハ其
保食神の御身を變化して然ル物と成ルハ有ベク
ラズ其御身の處ニヨリ其物共ハ成出タル者あり何
を以て言フとありバ上あり御饗食の物共をも皆其御
口より吐出給ヘルハ非ズ也然レバ其月夜見尊ハ逐

寤めりれ御在り坐し時小然々諸物ハ出來て其稻倉
山小遺りて在つる者ありけり儲其ハ世中を御照し
坐す日神の大御使として此國土の有の限を所知
食す素戔鳴尊の幸行し事あり有れ其事小感けて
此時小必出來り可き答めて己小第二書小即軻突
突智娶埴山姫生稚産靈と見えたり其事の正小整備
ハわろハ此時ふる小深く心を入て考奉り可き者ハ
カハ右の如く火神と土神と合坐て稚産靈神ハ成
の御徳の彰ハれ御在り坐るあり
云へ小得ハ云知ず甚小尊くあり
○頂ハ和名秋小頂
頼陸詞云頼訓伊太岐頂也頼頭上也と有り名義秋

小頂頼を伊多大岐と伊多大久とも有り又頂小
も頼少も頼少も伊多大岐と訓れ新撰字鏡ハ頂頂
の二字をも然訓り然れハ万葉三四十四ハ伊奈太吉ハ
伎須賣流玉者と有る奈字ハ多と誤りあり可し續
紀第五詔小頂受賜十四詔小頂尔受賜理忍末二十四
詔小頂尔受賜利忍美あじの頂イナキを鈴屋大人の解小石
の万葉歌ハ依て訓わたりハ正し敢れわがわし者ハ
其第七詔小頂伎忍美供奉と有る解小十一詔祖名戴
持而十二詔小忍理頂持十三詔小頂受賜利あじ有り
後拾遺集ハ大中臣輔親イナキ祖父イナキ孫輔親三世迄ハ戴奉

皇太御神と有る引て伊多太岐と訓わたりハ後
 小心著わし者と見ゆ又和名抄ハ巔山頂也和名伊太
 木とも有て山頂めても頭上めても其至りて高
 極あり所を伊多太岐と云ハ至高又ハ極高の義と
 聞えたり然れバ蘇以て伊奈太岐ハ伊多太岐の誤
 事知る多々奈ハ草体めて似たり字
 あり今も貴人より物を賜ふを戴くと云も
 頭上ハ捧げて恭しく受賜此ハ云あり○牛馬ハ
 農業を助る物めて和名抄ハ六畜和名ハ牛馬羊犬雞
 豕也と有るハ太毛乃と有る太字ハ其並あり獸を介
 毛乃と有ると相換りて誤れり事上六十ハ己ハ辨へた
 るガ如ク又其獸ハ毛津物ありを畜ハ飼物あり由右

皇極天皇三年御紀

小云ク天武天皇十三年御紀ハ六畜を年久佐能ハ毛
 乃と訓わたりも其四年ハ莫食牛馬犬猿鶏之食以外
 不在禁例と有る畜を食ふ事を禁止しわたり字
 ハ六畜の字を用給へれど西蕃めての定ハ異あり
 見えたり然れバ和名抄ハ所見たり六畜ハ周礼ハ
 小加ハ不可くも非ず豕ハ和名抄ハ毛群類ハ入て野猪和
 名又佐井奈岐と有れハ此ハ獸の部あり猪猿ハ亦
 獸ありども右ハ人ハ類者畜産の中ハ牛馬ハ農
 業ハ大ハ功有る事ハ云も更あり牛ハ重荷を負せ
 馬ハ千里を御行ハせあり功有る者ありハ保食神の
 御頂より成出て天下の祖牛祖馬と成れりゆむ事實

今事記訶志此言
 段ハ馬猪牛猪鶏猪
 天增之罪類ハ有る
 石ハ四ハて其其
 非ハるハ思ハ可ク

又通證引九
九云家陽記云雜
主司農大主或盜
牛負重載馬海
遠路有百

小諾、御事あり通證、大人訓字之君子訓字麻
比登則牛馬亦稱其能而名之也、云々、實小然、有
ぬ可り説ありあり、此牛馬小就た古事共ハ次小其
條ニをきて云べり小今此小云々
ハ世ハ牛馬と並べ云ふ事常あり、あり傳十卷四百
八十三丁ハ樺井神の牛馬小崇給ハ一事を己ハ云々
○牛ハ古語拾遺小昔在神代大地主神營田之日以牛
食、食田人于時御歳神之子至於其田、唾饗而還、以狀告
父御歳神發怒云々、と見えたり、此より以前
天熊人ハ此をもち去
て上天ハ至けむを此ハ留りて四方八面ハ蕃息
之れハ、ハ者あり此ハ外國の事あり、
ハ無仁天白王二
年御紀ハ一云初都怒我阿良斯等有國之時、黃牛負田

器將往田舍、黃牛忽失、則尋遺覓之跡、留一郡家中、時有
一老夫曰、汝所求牛者、入於此郡家中、然郡公等曰、由牛
所負物而推之、必設殺食、若其主、則以物償耳、即殺食也、覓至
若問牛直欲得何物、莫望財物、便欲得郡内祭神云、尔做
而郡公等到之、曰欲得何物、對如老夫之教、其所祭神是
白石也、云々、云事有ハ、此事古事記ハ、新羅國云々
有一賤夫云々、此人營田於山谷之間、故耕人等之飲食
負一牛而入山谷之中、遇逢其國王之子、天之日、問尔問
其人曰、何汝飲食、負牛入山谷、汝必殺食、是牛即捕其人
將入獄、因其人答曰、吾非殺牛、唯送田人之食耳、然猶不

敬尔解其腰之玉幣其國主之子故赦其賤夫云々見
えたり天之日牙ハ姓氏録ハ據々ハ神武天皇の御兄
稻飯命の後あわハ彼國俗ハ抱リハ皇國の古義
を傳へテ畜産を殺す事を忌たり者あり然れハ同
天皇御紀ハ第得大設牛酒以勞饗皇師焉ハ有るハ
唯彼ガ熟字を珍ク用給ヘテ實事ハ非ス事
を曉不可あり己ハ寶劔出現章第六一書ハ夫大已
貴命與少彥名命戮力一心經營天下復爲顯見蒼生及
畜産則定其療病之方云々有テ人類ハ畜産ハの病
を療給ハ方法を定させ給ヘテハ牛馬ハ晨作ハ功

有る者あわハあり然るを殺して食つて云事ハ我ハ
皇神の道ハ非れハ天神御子トシテ豈犯し給ハ事の
有む古事記ハ然而其第辛迦斯之獻大饗者悉賜其御
軍ハ有わハ古語ハ然傳り來つてむをカの
漢文の様ハ書取むハ後漢光武紀ハ争持牛酒
迎勞ト云ハ馬援傳ハ擊牛醢酒勞饗軍士ト有る字を
用給ヘテ耳の○馬ハ寶鏡開始章ハ又見天照太神方
織神衣居齋服殿則剥天班馬穿殿堯而投納ト見え
わハ此ハ正ハ天熊人の持去テ奉進わハあり儲此
ハ大被詞ハ謂ゆる天津罪の其一ハ素戔嗚尊の高
天原小御在ハ坐ハ時ハ其犯給ヘテ罪の甚ハ者ハ
不ハ傳ハ四百九十八下ハ引ハ御牧望月大伴神社記ハ月夜見

尊善海原哀治食須時龍馬尔衆給此四方乃國中之河
 二溪二尔至迄不殘腕腕巡給支其時千曲川尔到給此川
 上哀指天登給尔此溪川依清水成而求水土此登給支
 其所尔奇支巖有支故彼巖上尔登坐此四方哀望見給
 此云二月夜見尊此處尔鎮坐之時彼龍馬尔所置御鞍
 字自半擊天廣野之石尔懸賜支後世尔鞍掛石止號久
 其角馬者則駒乃種止成禮利云二と有て此の月夜
 見尊の傳たれども其素戔鳴尊の高天原より神逐ハ
 ねさせ御在り坐て此國土を所知食す其御時小先小
 保食神小過失アヤミナシ給へる御所行小償のりせさせ御在

一坐て天下の袒馬を此處より出し給へる委委委一
 ハ其傳小云る事共を合せ考ふ可但此馬小限らず想て保食神の御
 身より成出たる所の物共を天下小布弘め御在り坐
 現章小至る迄委一古事記小此八千矛神云々自出雲
 く説明の奉る可一
 將上坐倭國而束裝立時片御手者繫御馬之鞍片御足
 踏入其御鐙而歌曰云々見えたる神代より貴人
 ハ御て往來ハせ御在り坐りありけり海宮遊行章第
 ハ一書小海神所乘駿馬者八尋鯨也云々云事の有
 を以て小常小馬小御させ御在り坐す風習あり一事
 知る應神天皇十五年御紀小百濟王遣阿直岐貢良

社
 小神名式小出雲國
 島根郡生馬神社
 志天野信景を参
 考本國神名帳丹
 羽郡阿具馬神
 神神の下の格出雲
 生馬神社同之
 敬生馬神祭神
 保食神也と云り

馬二匹即養於輕坂上廐有此事古事記以牡馬壹疋牝馬壹疋付阿知吉師以貢上有此時より稍小蕃種有馬も交有ありけり然れども保食神の御身より成出たる者あり有ければ此牛馬も限らず惣ての種物等元皇大御國の者ありを大己貴以彦名二神の外國をも巡造り御在り坐し時各其土地の狀も隨ひて時生し給へりけり皆其國この土物を貢上り可御定共事あり可事云も更あり然るを年中行事秘抄日本紀云今案保食神已死其神之頂化爲牛馬爰難者云倭國無牛馬事見事傳故應神天皇世百濟進牛馬自此而彼倭國有牛馬若本自有牛馬者古先君臣宜扶節徒少字と云難者の説ハ皇

典の片端をた伺奉れり人の云べき事ハ應神天皇御世牝杜の良馬二匹をこり貢奉れり牛を何れの時奉り己の訶志比宮段馬婚牛婚あど云事の有韓征より以前の事あり牛馬己無くざる何が然る罪名を云事の有む口任せたる僻事と云者あり按ふ其書引る日本決釋と云者を作れり痴人雄略天皇十三年御紀歌宇摩能耶あじの漫言や都擬播鳴思稽短謀那斯有を釋馬八毛也言八疋也見え又農播拖摩能柯彼能短盧古摩矩羅枳制播云有を釋甲斐黑駒鞍著也言置鞍也注せり推古天皇二十年御紀大御歌宇摩奈羅磨譬武伽能古摩有を釋爲馬日向駒也駿馬也松記曰日向國出十里之駒見えたり孝德天皇白雉四年御紀大御

生神號云ニ復洗右眼因以生神號云ニ又信難
 傳ふがう長寛勅文の引る初天地本紀の伊謝那支
 命云ニ身体左肩忍奈豆流時成出来神名云ニ又右肩
 忍奈豆流時成出来神名云ニ又右肩
 保食神の御頂を何と爲させ御在り坐けむ其御所
 爲り此牛馬を始として次小所見たる種ニの物共
 成出来つる事灼然ければ化爲の字此めてハ當
 ざるあり傳の出来つる即起り者と思えたり又
 ハ此小牛馬以下の物の成出たり各其出所有れば
 實の保食神の御殿の變化はと思ひ誤へたり
 有べし何れも成りても僻事あり○願ハ名義抄の

比多比と有り日向方の義あり可し古事記神名の日
 名照額田毘道男伊許知迹神と有り日名照ハ額と云
 む發語あり可きをも思合す可し和名抄ハ額和名比
 大比と耳有れども名義抄ハ又奴可と云ふ一訓有ら
 如く古書ハ多く額字を書て兩訓ハ用る事あり垂仁
 天皇二年御紀ハ額有角人云ニ見え續紀第四十五
 詔ハ額ハ箭波立止背波箭方不立止云云と有
 額と背と對へたり此ハ以てハ額ハ表わして日向
 あり事を辨ふ可くあり万葉十二ハ肥人額髮結在云
 云々見え又名義抄ハ額を比多比其奴可と訓ハ
 題を比多比又奴可又波斯と有り

抽處の意して面部して最抽出て著明と所あり謂ふ
り万葉四三十一小額衝と云言の有り字の如く額を突
て敬ふ形容を云ふり姓氏録左京神別天神小額田部湯坐
連云云元恭天皇御世被遣薩摩國平隼人復奏之日獻
御馬一疋額有所形廻毛天皇喜之賜姓額田部也と云
事有り人名小ハ天孫本紀小建額赤命と云有も其字
の如くあり形容小依りあり可又古事記伊弉河
小葛城之高額比賣と云ハ和名抄郷名小大和國葛下
郡高額と有り地名を以て負りあり可りが土地あり
も小高くして人の額の如く所あり小ハ然號事也

有りて所見たり又郡名あり備後國奴可奴如と有も
如く人の頂をも山の頂をも右の類あり可上あり己小註せ
共小伊多太岐と云小同ト○粟ハ古事記ハ於二
耳生粟と有り其より以前國生段小粟國謂大垣都比
賣と有る粟國と云名義ハ記傳五七ハ粟の能出來る
國あり由の名あり可トと云わたり如くあり大垣都
比賣と云ハ此保食神同神ありハ其國名と成り
も其神の産土の國あり然云事と成けむ由己小
傳六百十ハ小註が如く偕皇御孫尊の御天降の時小
天神より齋庭之穗を奉依り授奉給へりあり此大八
洲國の名をハ豐原原十五百秋瑞穂國と名小負ふ

事小有ければも其以前ハ粟を耳專と作りたる
可ければ國名も粟國と云ふあどの事多在りし
見ゆ伯耆風土記ハ相見郡郡家之西北有粟嶋也日子
命等粟実實離即載粟彈渡常世國故云粟嶋也
有と以考ふ可し但此ハ寶劔出現章第六一書の引見
彼ハ久彦名命の常世國ハ渡坐一事を主とし此ハ其
粟島と云ふ名の所由を主とし立る所あり故ハ粟國
の例ハ引又伊賀風土記ハ此郡始属伊勢國云阿波庄
者あり天照太神自天上下天之阿波主給五穀長蔓故名阿波
謂阿波者音訛也と見えたるハ和名枚郡名ハ阿拜倍
と有る其地ハ就たる故事ありけり如此く皇太神

の天上より粟を天降し御在し坐て五穀の主と爲給
へしが其地ハ良ひて長く蔓これ故ハ阿波と云名
ハ成りし由あり後ハ瑞穂國と成ぬ上ハ稻ハ
勝りて尊の物ハ固より非る事あり然るを粟を以て
其主と爲給へるを思ふハ此ハ天熊人の持去て進ね
る後ハ先此粟を天降し置して然後ハ瑞穂ハ皇御孫
尊ハ属て天降し奉らせ給ひむとの御事あり可し然
れば御天降以前ハ穀物の長たる者ハ此粟を知今の
瑞穂の如くハ有けり神名式ハ阿拜郡敢國神社
大風土記ハ久彦名命也と有をも右の粟嶋の故事ハ

今但一言記小金山
彦命有り然也

思合す可し伊水温故と云物少彦名命神体山人の如し南宮金山姫神云云相殿命ハ昔ハ南宮山山小坐す今の

小富士是あり貞觀二年二月神告有て敢國神社小合

す神体蛇形神と有り此神社の事傳九卷七十一丁云云伊天照大神天上イリ天

之阿波を天降し給へる事ハ出雲風土記小飯石郡多

祿御所造天下大穴持命與須久奈比古命巡行天下

時稻種借此地處故云種と有か如く然る時小當りて

天上より隨降し給へり事の度小有りける者ふ

可天孫降臨章第六一書高皇產靈尊の天稚彦を

候小遣給へる所小乃遣無名雄雉往候之此雉降來因

見粟田豆田則留而不返云と有り瑞穂國と成り

以前ハ陸田草多在り狀あり事此を以知べきあり

神武天皇御紀大御歌小源都志俱梅能故羅餓介

耆茂等珥阿波赴珥破云と謡ハせ給へり阿波赴

を釋小謂粟富也と有れハ中洲雖も東征以前小

粟を專と佐わりありけり斯れハ其天皇畝傍檀原

宮小天下所知食より以來次小水田多く成以て

行乍も皇化の遠く及ぶ小隨ひて形の如く瑞穂國の

ハ成たり可けれハ其頃迄も陸田多在りけむ事知べ

きあり斯れハ其瑞穂ハも天神御子小屈たり物ふ

有る者の中ありも皇御孫尊を輕蔑の侵奉る心ふ

を飽く迄至尊き者小仕成むとの事ありも有べけれ

ども其主又ありありても何なりありても大君と戴奉

の仰奉り順奉り恐る仕奉る可きハ唯皇御孫尊耳御
在り坐す者其依て其主人を高く爲ると思ふハ
甚く愚あふ極むと云べし其主たる人の天下の富を
貴きと此二物を有ても皆皇大朝廷の御事任りか
依り事あるを匿めたる者其主人たる人を神皇
の罪人と爲る事ハ臣子たる者の志おても成す可き
事ハ然れバ天津日継の瑞穂を以て家禄とし又其
瑞穂を食ひて世お生存する者ハ限りハ皇御孫尊
を輕しめ侵り奉れりバ家亡び身亡びて竟るハ終り
子孫の八十連属お至り造り其祀を傳ふる事を古よ
り今お一人として得ざるあむ彼然るを國土經營
天神の返矢の御罰あり勝れりけり
の時お火彦名命の外國お持渡り御在り坐て其成れ
る國にハ殖弘め給へるが故ハ外國おてハ其物を五
穀の長と爲り事ありて其ハ御天降以前の皇國の風儀
の遺りあり者おあむ有けり其由已小傳六
百五十七

五十淡洲の傳見る可し和名杣ハ粟類と云有て其ハ
粟和名阿波未子也未是穗名被會標未成米也と見え
未字各義杣ハ阿波と有り梁未一名芭葉一名檜米和
名阿波乃字留之祢白梁米一名圓米と有り此を本草
和名ハアハハヒネ粟米又白梁粟又梁米と作り其ハ大粟の事
あり又同書ハ白梁米和名之呂岐阿波青梁米和名阿
波乃與祢米黍稷粟杭梗和名阿波乃毛知あり有り
其黍ハ同杣粟類ハ丹黍一名赤黍一名黃黍和名阿賀
木ニ美と有り林ハ粘粟也稷米一名秫和名木美乃毛
智と有り然れバ黍も粟の種類あり可きが粟ハ大僅

△見之各義杣ハ林
字其訓の外ハ母知後
備又母知阿波の訓

少て其實の小粒あり謂少て黍ハ黄實少て其色を以
 拵けたり者とあり所見たりけり稷ハ名義抄小阿波
 伎備に見え其下小黍稷爲五穀之長と有ハ漢家の定
 めて此方の古義ハ非なり孝經授神契ハ五穀衆
 多不可禘祭稷乃原濕
 之中能長五穀之祗故立稷而祭之と有て穀神の名ハ
 也負せたりを見べし又説文ハ木嘉穀也以二月始生
 八月而孰得之中和故謂之禾木也木王而生金王而
 死ハ木象其穗凡禾之属皆以禾と有て此少て禾ハ
 五穀の長なり由見えたり又稷嘉穀實也从酉从米孔
 子曰粟之爲言續也と云ハ許慎説小古者以粟爲黍稷
 梁秋之穂拵也今之粟在古但呼爲梁後人乃專以梁之
 細者名粟と云ハ彼少て其粟類の穂拵ありしハ
 少りけり○眉ハ目寄少て目ハ傍たり所の謂あり可り名
 義抄小麻由と訓て有れり也言の重ハ時ハ麻用と轉

一云例と見え七仲哀天皇御紀小如美女之眼と有る
 睽字を麻用毘伎と訓て古事記明宮段大御歌小美都
 具理能曾能那迦都迹表加夫都久麻肥迹波阿成受麻
 用賀岐許迹加岐多禮と有り又万葉六二十小一目見
 之人之眉引十一十七小歡三跡咲年眉曳あどの眉ハ
 麻用と訓るも皆其連聲小依れりあり其外ハ四二十
 小眉根六二十小眉根搔あど有ハ麻由と訓り六三十
 小如眉と有ハ之字を以受たりバ此等ハ麻由と常の
 如くあり訓へり所ありけり眉根搔と云事ハ万葉小
 甚多き語ありけり然耳
 ハとて引漏一眉ハ字書小目上毛也と注一黛字を
 詩格注小畫眉墨也と云ハ釋名小滅去眉毛以此代也

△ウズ水九九
年生の新葉眉
の唐衣千代を係
て予祝ひ初つ永
久百首小御物
新葉眉の糸を
以て標年を繰く
備へつ哉をこ見

故謂之黛。○蠶。加比古と訓來々事ハ有れども保
食神の御眉より成出たり者あれば麻由と訓む方ふ
む勝りたる可き和名抄小蠶和名萬由蠶衣也獨蠶和
名比岐萬遊と見え桑蠶和名又波萬由桑蠶即桑蠶也
有り万葉十四丁三小筑波祢乃尔比具波麻欲能伎奴
波安禮柿伎美我美家思志安夜尔伎保思母十二
ハ中中二人跡不在者桑子尔毛成益物乎玉之緒許ふ
ども有が如く實小桑蠶ハ桑蠶ふ者ありけり若て
其蠶云々ハ其桑蠶の(宋其穀小藏水云云)稱ありて
惣ての名ハ非あり万葉十一丁三小足常母養子

△催馬樂走平波
之利平乃已加也加
利平乃已加也加
礼尔己曾未由川
久良世天伊止比
支名左女又堀河
百首小水上如何
多眉を操海
絶せむらむ瀧
の白糸と有り

△又野蠶と阿未
由云も山あて自然
の繭あり由あり

借此小半馬と蠶と一成就たる小蠶て音異多事有上
くハ蠶馬の多志國の漢かして成出り物あり馬を出地
多ハ決めて買ハ馬と蠶と善西を共ハ爲と事試見
物ハ蠶爲天駒星他何云女兒太古時人遠在家有二女并馬二正女
思父乃戲馬曰能爲我與得定歸者將嫁汝馬乃絶韉
父所父駿馬影徒家有故棄之而還駿馬見之輒怒而奪父駿馬之父
怪而密問其女其具是果答父所教馬漢皮於夜所也足感之
曰尔馬也欲入爲婦自取屠割何如言未竟皮故然起抱女而行父
還失口後大樹之間得及蓋化爲續蠶於樹其繭厚大如常
鄰婦取之具收二倍今也以謂蠶爲女也蓋古之道遠語也
事の有ハ此の故事の彼ハ訛傳たり者多かりけり若し傳三丁卷百
十丁小橋唐風土記の蠶子ハ養蠶者有日ハ道也ハ此
ハ七比愛とハ云ありけり養蠶合和詞ハ蠶養の海ハ正月
子日午年生せり女子を養蠶と稱し蠶室を捨持ハ祝
子日午の月午日初ハ蠶の初ハ蠶の初ハ蠶の初ハ蠶の初
初し柔ハ行て四月月眉引く時と云ふこと有て午日を用ふ事
由有る事ハ有るハ蠶の初ハ蠶の初ハ蠶の初ハ蠶の初
子日取らるる小蠶ハ玉の緒是ハ日合ハ養蠶者ハ正月
子日取らるる小蠶ハ玉の緒是ハ日合ハ養蠶者ハ正月
事多ハ此を柱ハ玉の緒とハ云ふこと有て事ハ有る

○日本書紀傳五

○百四十二

△うま水九斗
 年生の新葉肩
 の唐衣子代を係
 て予祝ひ初つる永
 久百首小御負物
 新來眉の糸を
 以て標子と續く
 備へつる哉をい見

故謂之黛。○蠶ハ加比古と訓來々事ハ有れども保
 食神の御眉より成出たり者あはば麻由と訓む方ふ
 む勝りたる可き和名抄小蠶和名萬由蠶衣也獨蠶和
 名比岐萬遊と見え桑蠶和名久波萬由桑蠶即桑蠶也
 有る方葉十四三小筑波祢乃尔比具波麻欲能伎奴
 波安禮柿伎美我美家思志安夜尔伎保思母十二二十
 小中中二人跡不在者桑子尔毛成益物乎玉之緒許あ
 ども有が如く實小桑蠶ハ桑蠶あり者ありけり若て
 其蠶と云々ハ其桑蠶クムの報其穀小藏水々を云称ありて
 惣ての名ハ非あり方葉十一十二小足常母養子

今直馬集正平文
 眉隱馬聲蜂音石花蜘蛛荒鹿異母ニ不相而十三十一
 小帶乳根笑母之養蚕之眉隱氣衝渡と有るどハ人の
 傳傳つく女の事を養蠶の蠶中小隱れり小譬へたる者
 小ハ有れりも蠶コと蠶ニと差別知る事あり十四
 有ハ右小云々如く眉をも麻用と云小同ト字書小繭
 與補同袍衣也と見えたるもて繭小袍めり義有と
 知べし本小金と作り金ハ蠶の略字蠶ハ繭の俗字ふ
 名義抄小繭字を蠶室也と有る如く未繅小抽出
 ざる程を又加比古と訓るハ第二一書小即軒遇突智
 云あり

眉隱ニ在妹見依鴨十二十六小垂乳根之母我養蚕乃
 眉隱馬聲蜂音石花蜘蛛荒鹿異母ニ不相而十三十一
 小帶乳根笑母之養蚕之眉隱氣衝渡と有るどハ人の
 傳傳つく女の事を養蠶の蠶中小隱れり小譬へたる者
 小ハ有れりも蠶コと蠶ニと差別知る事あり十四
 有ハ右小云々如く眉をも麻用と云小同ト字書小繭
 與補同袍衣也と見えたるもて繭小袍めり義有と
 知べし本小金と作り金ハ蠶の略字蠶ハ繭の俗字ふ
 名義抄小繭字を蠶室也と有る如く未繅小抽出
 ざる程を又加比古と訓るハ第二一書小即軒遇突智
 云あり

混れ傳ハハノ事已小傳九四十下小註ヲ如ク此ハ必
 一也其如く眉上生蠶與桑と有べきを繭ミヅめて初て成
 出たりノ事を明さむとして生蠶と作れたり者あり其
 繭ハ蠶コを桑以て飼育して成れり者ありバ其義ハ於
 て少くも異あり可り本草和名ハ白強蠶和名加比古と有リず和名抄ハ蠶和名加比古一
 訓古加比須虫吐絲也ノ見え名義抄ハ其二訓有る
 事ありガ其加比ハ養カフの意あり古と云ふ打任せたり
 名ハ有けり右ハ引る万葉の歌共ハ養カフ子カフとも養蠶カフ
 とも見え又同抄ハ蠶沙和名古久曾蠶矢名也と云ハ
 姓氏録左京皇子部宿祢云々大泊瀬幼武天皇御世蝶

蠶所遣諸國收斂蠶兒誤 小兒負之云々有ガ如ク
 蠶と兒と取誤へたりありとも當昔蠶を古と呼たりガ
 故ありけり 右ハ雄略天皇六年御紀ハ出たり故事
 小建貝兒王と有る御紀ハ武卯王と有る和名抄ハ
 卵カ和名加比古鳥胎也鴨俗云加倍流卵郭化也と見え
 たり思ひ加比古ハ貝兒カして其卵を以て生る由あり
 猶鹿説あり有けり 古事記高津宮段ハ於是ハ子臣亦
 其妹ハ比賣及双理能美三人議而令奏天皇云大后幸
 行所以者奴理能美之所養虫一度爲蠶虫一度爲カミ蠶一
 度爲飛鳥有變三色之奇虫者行此虫而入坐耳更無異
 心如此奏時天皇詔然者吾思奇異故欲見行自大宮上

幸行入坐奴理能美之家時其奴理能美已所養之三種
 虫獻於太后云云有ハ蠶之事を事ニシテ今奏天
 皇の幸行を促カシ奉りて太后との御間を善ハシク
 成奉ルモ謀奉ル者ハ一度爲蠶虫ハ其始卵
 を出テ蠶虫ト成ル是あり一度爲殼ハ其虫の素柘
 を食リテ繭を作ル事アリ（此ハ至リテ其ハ隱）同枚ハ蠶云ニ虫吐絲也
 有ル時を云アリ一度爲飛鳥ハ其事を甚しく云ハ
 其飛虫ト成ルを殊更ハ然云ハ同枚ハ蛾和
 名比ニ流蠶作飛虫也ト云ヒ又蠶和名比ニ流蠶内老
 蠶也ト云ハ是あり此ハ蠶の繭を作ル事アリ老蠶ハ至

此の初中後の狀あり何の奇珍クシキ事ありモ非
 りけれども悉く大仰しく言立たる者ハあり有ける
 凡て物を甚しく云むとてハ下津石根ル宮柱太敷立
 高天原ル十木高知豆又ハ君カ代ハ千世ハ八十代ル
 云ニあど云カ如ク其度ハ超過ル事云ハ者あり
 けハ飛虫を飛鳥ト云ハ滑稽ト有テ甚ハ興有
 ル御事ハ○眼中生禪ハ古事記ハ於ニ目生稻種
 有ハ然れども此の方宜しく可ハ然ハ禪の麗
 ニシテ形容恰クも實ハ眼の狀ハ似たれバあり和名
 枚麻類ハ胡麻又荏和名衣野玉葉云葉細而香其實黒
 者曰蘓新枚本草云和名乃良衣一云奴加衣云ニ楊氏
 漢語枚云香葉和名以沼衣ト有テ其次ハ禪和名比衣

△多う躬恒集小比
叡山苗ふらぬ草
取返し植し由小禪
の止すし生ふり或
し有

草之似穀者也と有り古事記序小時有舎人姓禪田名
阿禮年是二十八云こと有を記傳二 小大和國添
上郡禪田村有り其地より起れり姓あり可き由小云
ねたりを神名式あり賣大神社其地小在り比咩と比
衣と通へるあり然れば右の某衣と云る共小眼の意
あり可き事上小云る眉と鬘との如くあり可きあり
万葉十一 十一 小打田禪數多雖有擇爲我夜一人宿り
有ハ稻の中ハ交れりを擇て枝捨る事を譬言小して詠
る者あり 通證ハ右の荏又蕪又香柔あどを引て据此
小飯の意ありあり口訣小禪殖室 ○腹中ハ波羅奴知
問地故云眼中と有ハ推當あり

と訓べし神功皇后御紀歌小干池能阿曾餓波羅濃知
波と有り第二一書小稚産靈神の臍中生五穀と有ハ
此傳の混れたるあり可き事已小傳九四十ハ云り偕
上あり願と眉と小ハ上と見え此の腹と右の臍と小
ハ正しく中と見えなれば賣小保食神の御腹の中ふ
る者あり中字輕く見過す可き又此小就て奴ふ
る事あり有けり然るハ大同類聚方小於保奈牟知命
乃美已止仁古御言迺美波阿萬乃保乃計都知 味豆阿治
字奈伽和太仁伊連都伊太須古登乃大要那流字都佞
止之底云こと見えたり其味と云ハ食物の事ありを

先思不可其第二章小保乃解波云美豆阿治字訶
治萬計奈利久智與利奈可味太仁伊別萬自陪保乃解
仁訶裳世天云こ有て安治の事を總に到小宣へ是
ふ其第八章小娜訶波囉仁都玖裳濃と有る其一小布
玖囉和名抄小肺和名布久不久之と有る是あり二小
費久囉ハ第十一章小申唎囉波無祿知武差乃奈伽母
仁阿利と有れば心藏の事あり名義抄小那加基と
那加比陀と云り三小畿裳ハ和名抄小肝和名岐毛
と見え四小倚ハ同抄小膽和名伊爲中精之府と云ひ
五小與吳新ハ同抄小脾和名與古之と有り六小ハ伊
飛婦俱あり此下云べし七小牟良登同抄小賢和名

無良止と有り八小久楚味太ハ同抄曾和名久曾和太
布久呂爲五穀之府と見え名義抄ハ久曾布久呂と
有り諸其第六伊飛婦俱ハ飯袋と云事あり其を第
十四章小伊日婦具者餘古志濃軒方中反奈可仁阿利天
訶形太致蒙太比乃吳登九倚路音呂支天有知尔濃美久
日乃毛乃袁字差免訶毛反天志毛久袒曾腸和多尔關多婦
云こ有れば大腸小腸の事あり和名抄小大腸
爲傳送之府小腸和名保曾和太爲受盛之府と見え名
義抄ハ大腸を意旨和多と見え腸を波良和多と久
曾和多と右の如く腸を飯袋と云らハ其食物を納り
醸す所の名ありけりハ其保食神の御腹より飯小炊

く可き米の成り多む事ハ實ハ相叶へる古傳あり者
 あり若て其飯ハ氣實あり由己小上五十小註せらるが
 如く又稻ハ飯根あり事次小云ら如くあれハ彼此考
 合せたりむハ其意知る可口訣小稻殖廣熟地
 故云腹中と云らハ
 淡よりき説めて神代の古傳を後人の推當たり者
 爲るや甚々味氣無事あり有けり然れハ此ハ
 古事記より正しき ○稻ハ通證ハ飯根あり由云り
 眞の傳あり有けり
 此ハ皇大御國の地小良へる嘉穀ありて皇御孫尊の
 天津高御座の大御業を天津日嗣と稱奉り又此皇大
 國を瑞穂國と稱云り皆此稻穂小因り事上件條
 小云ら如く偕天孫降臨章第二一書小天照太神又

今又出雲風土記
 郡領佐神領佐
 能命云々大須佐
 小須佐田定給
 佐云事也見たり

勅日以吾高天原所御齋庭之穗亦當御於吾兒と有ハ
 右の事の起原ハ有れども押並ての事ハ非りけ
 めども已く稻ハ素戔嗚尊の御時より有初てあり有
 けり其ハ寶劍出現章ハ其右神の御名を奇稻田姫と
 見え其父母ニ神小稻田宮主神と云號を賜へるあり
 是あり然るハ此保食神ハ事有るより以來種々の惡
 しみ御態共有るども其御心の清く成りて御
 在り坐し後ハ其以前の御過失共を償はせ御在り坐
 て其保食神の御靈を殖奉りて給ひて食物衣服住
 宅の事を起して天下蒼生小御恩頼を蒙りて御在

一坐一事此より下小次ニ述々が如く成けぬあり
故古事記小又娶大山津見神之女名神大市比賣生子
大年神次宇迦之御魂神と有るハ殊更ハ其農作ナリトヒの神
と令生給へる者あり年ハ田寄の義御魂ハ恩頼の義
小共ハ其保食神の御功用を資奉らせ給へる神等ハ
御在ハ坐す御事を思ふ可ハ古語拾遺ハ昔在神代大
地主神營田之日云々于時御歳神之子至於其田唾饗
而還以狀告父御歳神發怒云々依教奉謝御歳神答曰
實吾意也云々仍從其教苗葉復後茂年穀豐稔云々と見
えたる御歳神ハ其大年神の御子ハ御在ハ坐す當

山田傳サ六百三十八
七云々

昔己ハ其農作の事を守護々神ありて御在ハ坐けざるを
考ふ可ハ但此ハ素戔嗚尊己ハ皇御孫尊天津日繼ハ
事を豫て思ふ事故ハ然々神を定め出雲風土記ハ
置せさせ御在ハ坐ハ事下小云カ如ク出雲風土記ハ
飯石郡多祢郷所造天下大神大穴持命與須久奈比古
命巡行天下時稻種隨此處故云種神龜三年と有る稻
種ハ何處よりハ墮來るハ必天神の御許より天降
一給ひけむ事古事記あり神產巢日御祖命の御言ハ
久名毘古那神の御事を故與汝葦原色許男命爲兄弟
而作堅其國ハ宣へるを以曉々可ハ其所謂ハ依々
見えて楯縫郡玖潭郷所造天下大神命天御飯田之御

倉將造給並覓巡行給去^云こ^云有ハ天より墮降^云御
稻多^云故ハ天御飯田と崇め宣へる者と所見たり
又出雲郡美譚郷所造天下大神御子和加布都努志命
天地初判之後天御領田之長供奉坐之云こ^云有^云天
御領田^{ミシロダ}ハ其稻種を作^云て天神を齋奉^云せ給ふ所^新ふ
り^云故ハ殊^云ハ其長^ヲを定させ給へり^云聞ゆ又神門郡
小稻積山と見え下ハ大神之稻積也と有り又稻山
と有て下ハ大神之御稻と見えたり斯れハ天神御子
の未天降り御在^云坐ざり^云以前ハ己ハ稻の事有り
然れども瑞穂國と名も稱ふる許ハ國の退^云ハ山の

隈ニ遺る所無く足満る事ハ全く天津日継の定あり
せ御在^云坐^云り次ハ弘^云行た^云事上^{百三十九}ハ
も粗云^云ガ如^云猶又仁多郡三處郷大穴特命詔此地
始^云りて田^云ハ云^云事^云の多在^云ハ皆^云和名抄稻類ハ稻今
御天降^云り^云以前^云の事^云あり^云和名抄稻類ハ稻今
按稻熟有早晚取其名和名早稻和勢晚稻於久天云^云
芒和名乃木禾穂芒也穂和名保禾穀末也と有り其早
稻ハ万葉七^{三十一}ハ石上振之早田字八^{五十一}ハ吾之時
有早田之穂立又秋田早穂乃變十^{四十七}ハ早田者不崩
霜者雖零又^{五十一}門田早稻時過^云去^云有^云和勢ハ
走^云稻^云の義あり晚稻^云ハ後稻^云の義あり又中稻^云ハ云^云稱有

何れも氏ハ糧カチの略ハ有べしズキ芒ハ名義抄ハ
 能岐ニ云訓ハ外ハ登我流カヒニ有ハ矣カヒ多クを思ふハ貫ヌキ
 同トリテ可一穂ハ下ある無類の下ハ云ベ一祐稻中
云事ハ名義抄ハ見えざれども今も早稲遅稲
稲ハ並云事あり時珍説ハ早稲稲六七月收者遅稲
稲ハ九月收者晚稲稲十月收者ト云ハ是あり芒
ハ字書ハ草端也ト注セリ名義抄ハ托又托ハ作りテ
草端也能祝詞ハ其稲の事を奥津御年ト云ハ御年
 岐ト有り
 神詞ハ皇神等能依左奉年奥津御年年手肱尔水沫畫
 無向股尔泥畫寄尔取作年奥津御年年八束穂能伊加
 志穂尔皇神等能依左奉年者云ハ水分神詞ハ皇神等能
 寄志奉年奥都御年年八束穂能伊加志穂尔寄志奉年者

云ニト有ハ奥津御年ハ即此稲の事ありあり其奥津
 云々ハ大の意あり古書ハ瀛津鏡邊津鏡あり云々
 ハ大小の義あり海あり奥ト云ハ邊ト云ハ遠近
 の義あり若テ其遠近ハ大小ハ異ありざらガ故ハ御
 紀ハハ大字を遠灼トホシク久ト訓セたり祝詞考ハ五穀の中
 ハ稲ハ最末ハ熟ト故ハ奥ト云ハ譬ハ同ト稲ハ
 も晚ク成クを晚稲ト云ハも同トト云ハハ晚ク意
 ハ見ハハたハ故ハ遠ク義ありども五穀の中ハ最勝
 ねたハ所以を兼ハハハ大の意ハ成テ奥津御年ハ
 大年ト云ハ相異ありざら者あり古歌ハ湊志祢加流
ハ訓ハハ晚稲所

義あらず其ハ晚稻の事アテハ有れども早稻中稻ハ
其稻の常ハ非ズ晚稻ヲ神隨ハ者ハ有けれハ
奥津御年の奥も亦
右ハ同トク可
○陰ハ保食神ハ古事記ハ大氣都
比賣神ト有ケ如ク女神ハ御在ハ坐セバ其御陰門ハ
ヲ陰の事ハ傳九ニテハ云ウ儲此ハ交大豆小豆を
御陰一處ヨリ成出タク趣アヲ彼記ハ於鼻生小
豆於陰生交於尻生大豆ト見え舊事記ハ於臍尻生
交豆於陰下生小豆交ト有テ此ト同トク然レド
モ何れハ少宛の差有テ合ザレバ此御紀ハ据ヨリ
外無クハ就テ考ルハ陰ト有ハ其惣ト云クテ陰
ト尻ト有テ有ベリケ其陰ハ大豆小豆尻ハ交の

成ハカト思ふ由有テ其下ハ云ケ如クハ豆類
ハ成出ベクハ此をハハ収む可ク又舊事記ハ交の
生ル事ヲ二所ハ云クハ何レクハハ行ルルル可
ク○交ハ通證ハ聚芒也ト云ク又ハ身白クテ其身の
ニ白合ヒテ形を成セシ由ル可クハ葉十二二十ハ拒
柎越ル交咋駒乃十四三十ハ久故胡之ハ武藝波武古
宇馬能又宇麻勢胡之年伎波武古麻能アヒ有レ儲和
名枚麥類ハ大交一名香料麥和名布止無岐一云加知
加大小交知和名古年岐一云末年岐ト有レ右の大字を
此ハ布止ト訓テハ有レども今並テ世ハ言當ト
云レハ加知加太ト云訓義詳詳アズ又蒼麥和名曾波

牟岐一云久呂無木と見えたりは其も麥の一種ありて
 有あり諸大麥小麥共（身と合せたる狀にして）小女陰の形小似たりは實小御
 陰より成出たりけり又思ふ小己甚幼稚りりし時
小本生の國ありて常小人の云
 小諺を聞居たりを今思出たり其ハ大麥ハ固より日
 本ハ無き物ありしを大師様が天竺より尻穴ハ三
 粒變りて歸りし故ハ一名大師麥とも云と云ハ此
 の故事を弘法と云僧の事ハ混へたる者あり可
 其始保食神の御尻より僅ハ三粒許成出たり種と
 成りて天下ハ弘くばり有べし斯ハ古老の諺も
 無下ハ捨べりざれば麥ハ御尻
（り）成出けむと今試ハ云あり
 説小圓實也と云ハ又ハ眞實あり可（ミ）其ハ万葉小左
 右とも西とも二とも共小麻と訓たり麻ありて豆ハ
 女陰の形して其身の行合たる狀ありはありとあり

今名義考す所無し通
 證小赤解也也亦亦
 煮之能腐熟有ハ
 迂遠物と説あり若
 く赤粒食ありや
 應神天皇御紀ハ阿
 豆松梓摩之訓也御
 在ハ坐ハ事見えたり
 小万葉上ハ小阿摩
 伎那久ハ小豆鳴ハ作
 然ハ然ハ云ハハハ
 然ハハハ

麥の身向あり可き小思合す可し和名扱小豆類と有
 て大豆一名菽和名萬米と見えたり今も女陰を麻米
と云も此保食神
 の御陰より大豆小豆あじの出来たり古言の傳ハ
 わりあり有べき又此大豆小豆を始として凡て豆類
 の其形女陰の如くふ
（り）證ハ足なり
 ○小豆ハ和名扱小赤小豆和名
 阿加安豆木と有り此ハ豆類ハ有けりは其大豆小
 属々物ありども古事記ハ次生小豆嶋亦名謂大野キ
 比賣あじ云事も有て世小名高りりハ此ハ別
 小出たり者あり可し然れども予ハ思ふハ稻と云
 ハハ稻類麥と云ハハ麥類ありて其種類あり物ハ皆其
 小属て共小生出たりと思しけりハ此ハ小豆を云

ろハ舊事紀ハ黍粟とニ益出せテ類少テ重複れル者
ありむとゾ所思ゆるハ也 然々ハ此ハ古事記ハ
其同種ノ物多ク故あるを舊事紀ハ黍一トハ似テ
却リテ其意狭ク成れバ此大豆ノ上ハ小豆を云ハ
右ト同ト事ありカヤ周礼ハ九穀ノ名有テ注ハ稷
黍稻粱菽麻大豆小豆小麦ト有ノ限リを云ル中ハ
ハ狭キカ如シ ○悉取ハ悉久ル取スト訓ベク取持
ト續キ讀ム時ハ取字ハカ無ケルバ冬ト受テ持字ト
離フ可クあり古事記玉垣宮段ハ又天皇以三宅連等
之祖名多遲麻モ理遣常世國今來^求登岐士玖能迦玖能
木實故云ニ遂到其國採其木實云々將來之間云々ト
有ト同ト意味あり所ありバあり又悉字ハ上あり悉

備ノ字ハ照一應ヘタル所ありバ盡^{トクク}ト訓ベク皆トハ
訓ベク^{トクク}ズ ○持去而ハ去字由久ト訓ハ万葉三^{三十}
ハ海若之奧尔特行而ト云例も有テ允ハ字ハ就テ嘗
ハ訓めてハ有れども天神ノ大御使トシテ天降り
著テ其覆奏ノ時ノ文ハ餘リハ無禮^{トクク}ハ語あり
如何ハ爲ても此ハ落着^{トクク}故右ハ引ル玉垣宮段ノ文
ハ白常世國之登岐士玖能木實持參上侍ト有ル語ハ
依テ字ハ抱^{トクク}ハ持參上而ト訓見ルハ相叶ヘル
心チ^{トクク}故然訓フ然^{トクク}ハ瑞珠盟約章ハ素戔鳴尊ノ高
天原ハ向給ハ事ハ昇詣^{トクク}之於天ト有ル古事記御天降

△又玉垣宮殿小取其
鳥二持上獻有也
此の例あり

段小故建御雷神返參上復嘆言向和乎葦原中國之狀
あじ天小昇々小ハ然云例あねバあり記傳七小參ハ
云ふ此ハ出々方昇のて趣々所を尊む時小云ふ
り有が如一況て高天原へあねバ上ハ必云可
り者
○奉進之ハ瑞珠盟約章第二一書小進タテマツル以瑞八坂
瓊之曲玉寶鏡開始章第三一書小且吾以清心所生兒
等亦奉於妙寶劍出現章小素戔鳴尊曰是神劍也吾何
敢松以安乎乃上獻於天神也其第四一書小其同ハ事
を乃遣五世孫天之菩根神上奉於天天孫降臨章第二
一書小乃使二女持百机飯食奉進海宮遊行章小復授
潮満瓊及潮涸瓊其第七一書小ハ復進潮満瓊潮涸瓊

二種寶物あじ有て皆物を貴人小進タテマツルす々小云り古
事記小ハ貢進を也獻奉也然訓せたり小御天降段小
恐之此國者立奉天神之御子云々我之女二立立奉由
者云々歌小ハ須世理毘賣命の御小登與美岐多底麻
都良世又万葉十八二十下小多豆麻豆流御調寶波二十
五下小多豆麻都流美都奇能能者あじ有り偕此多底
麻都流小立奉と作々ハ言義を知小便有り皇太神宮
儀式帳六月二次祭直會歌小佐古久志呂伊須ニ乃宮
尔御氣立止云々有ハ御饌立めて立々ハ御前小捧
置くを云ふり
其元ハ其御前小幣帛の品を立並べた
るり出々言あ可今也上方の

方言ハ食物ヲ人ハ饗スル事ヲ多ク奉ル也
多ク流ル也云ハ此古言ノ遺也
云ハ身聯ル我ヨリ後行テ列ル合ハ意ル其
即敬詞トハ成ル可ク其ハ祭祀ヲ然云ル其神
ノ御許ハ往テ親ク仕奉ル起ル祢ル可ク歸順
ヲ麻都呂布ト云ル其疎ク人ノ往テ從ハ祢
ル也
神乃奉御調等十一
之君尔奉跡十五
十八
麻都流ト訓ハ證あり然ハ古書中ハ往テ供奉ル

仕奉ル也有テ奉字ハ多ク麻都流トハ訓ベク
事記傳ノ説ノ如ク
麻都流ト訓ハ事ヲ知ル可ク
大神怒甚之ト有テ對ヘテ伊多久喜許婆志氏ト訓ベ
古事記ハ三貴子ヲ得給ヘテ所ハ此時伊那都岐命
大歡喜詔云コト有テ次ハ須佐之男命ノ事依テ賜ヘ
ク一國ヲ所知者
忿怒詔云コト有テ如ク怒リノ甚ク事ハ其喜ビ
也亦甚ク者有テ如ク此訓ハ叶ラズ八洲起元章
第二一書ハ喜之田ト有テ傳七

書小先發喜言と云事有り傳九十二 小云り〇顯見蒼
生ハ下小此云宇都志枳阿烏比等久佐と注されたり
寶劍出現章第五一書小素戔鳴尊曰云被可以爲顯
見蒼生與津彙戸將卧之具第六一書小夫大己貴命與
少彦名命戮力一心經營天下復爲顯見蒼生及畜產則
定其療病之方云是以百姓至今咸蒙恩賴天孫降臨
章第二一書小磐長姬耻恨而唾之注曰顯見蒼生者如木
華之俄遷轉當衰矣衰と見え古事記ハ尔伊邪那岐
命告桃子汝如助吾於葦原中國所有宇都志伎青人草
之落若瀨而患惚時可助告賜名号意當加牟豆美命

見え又伊豆志神段ハ我御世之事能許曾神習又宇都
志伎青人草習字と云古語を載たり右等ハ何れも神
等の御上より活と生る人種の事を宣ふ御言ハ限
りたり御事ハて記傳六二十 小目小見えず顯ハあり
女神ハ對へて顯ハれたる世人と云事五丁云れたる
ガ如く縦也顯人神ハ御在り坐すとも同トク現身
ガちありてハ云ぬ詞あり顯人神の御上より天下の人
ヲ若て其仕奉る人民の上ありてハ御民と云て天皇の
大御民あり由ありガ如く同ト人民の稱あり神よ
リ云々天皇より云我等より云 寶劍出現章第六一
と如此くハ三の差別有る事あり 書小見えたり大國主神の亦名共の中ハ亦曰顯國玉

須佐之男命の御言
小爲大國主神亦爲
宇都志國玉神有
此御名の起あり又

神と見えたり下小顯此云于都斯と見え又古事記ふ
綿津見神の御子小宇都志日金折命と申すも有り
天孫降臨章第二一書小高皇產靈傳勅大已貴命曰夫
汝所治顯露之事宜是吾孫治之汝則可以治神事汝則
可以治神事云々大已貴命報曰吾所治顯露事者皇孫
當治吾將退治幽事と有る其顯露事小對へたり幽事
ハ神事と一あり少て隱身の神と顯身の人の差見
えたり顯露之事を出雲神賀詞小現事顯事と有り又
中臣壽詞小皇御孫尊乃御膳都水波宇都志國乃水仁
天都水遠加豆奉年申止事教給云々と有て此ハ顯

國と天とを對へたり神武天皇御紀小今以高皇產靈
尊朕親作顯齋と有ハ天神の御靈を眼前に令坐奉て
齋とせ御在し坐す由あり顯齋此云于圖詩怡破毗
と記され古事記朝倉宮段の葛城之一言主之大神の
御形を顯ハし見え奉らせ給へるを天皇於是惶畏
而白恐我大神有宇都志意美者不覺白而云々と有る
神ハ顯ハ小御形を現ハし御在し坐さる者ありハ
ウ續紀第四詔小和銅の出たり事を此物者天生神地
坐祇乃相下豆奈比奉福波倍奉事依而顯出寶在
之羅云二第六詔小大瑞の出たり事を于都斯久母皇朕政

乃所致物^ル在^米耶云云此大瑞物者天坐神地坐神乃相
宇豆^奈奉福奉事^ル依而顯奉^留貴瑞云云あど見えたる

此等ハ何れも宇都志と云語の據あり者あり

詞あり現事を名義抄ハ阿良比登基登登有ハ顯人事

の謂あり顯事を同抄ハ阿佐良米基登登有ハ鮮見事

の謂あり又今本の詞訓ハ阿伎良米基登登有ハ明見事

の謂あり其ハ宇都志ハ阿良波須と其意同トけれハ

あつて寶鏡閣始章第一書ハ圖造彼神之象と有

る圖造ハ寫造の由ありと阿良波斯都久流と訓とを

考合せて故神の隱身ありハ對へて人を顯身と云り

心得べし故神の隱身ありハ對へて人を顯身と云り

其を宇都世美と多く云々ハ音の通へハありハ葉一

十一 三山御歌ハ神代從如此ル有良之古昔母然ル有

許曾虛蟬毛孀子相格良思吉と神代ハ顯身^{對へて}の事を詠

せ給ひニ^{二十}三^丁 天皇崩時婦人作歌ハ空蟬師神ル不勝

者と詠るも顯身ハ神ハ得堪ぬハ崩御ハ由を云あり

私記ハ顯見者見在之義也人民者是顯然所在故云宇

都之支と有れども猶義を盡さず故思ふハ宇都ハ表^表

出の義ありて此第一書ハ吾欲生御宙之珍^子と有る

下小珍此云于圖と見え其を古事記ハ吾者生^子

而於生終得三貴子と見え大殿祭詞ハ皇我宇都御

子皇御孫之命と有て珍とも貴とも書きたれハ敬

詞あり然る物より其本の表出の義ありハ崇むる

言ハ成れりありて右ハ多くの中より抽出たる表出

あり隱身の神より顯身を令生給へるハ其幽あり裡
より顯ハ小出給へるありバ宇都ハ表出めて志
も志伎とも活くハ其状を云ふ辞あり者ありけり然
れハ宇豆乃幣帛と云も上加ハ出表るハ許あるを云
ハ宇豆高きありと云も上ハ出表ハけて高きを云あり
故宇都志を表出の義と見る時ハ右の類の語共悉ハ
説得る可くあり有ける者又神を圖して顯見蒼生
有る天を圖して顯國有る斯れハ神等の顯見蒼生
宣へるハ我が如ク人種と云意あり可然ハ宇都
の義ありハ志又志伎と云ハ其形容の辞ありハ表出
先ハ師説ハ從ひて宇都志ハ愛くハ義あり

と思ひハ其ハ別ある語あり事傳十卷百九十
六下ハ云々如ク又珍子の事ハ傳九卷二下ハ云り
諸此ハ表出の意の語ありハ宇都ハ清て訓ベクハ珍
子宇豆乃幣帛ありハ濁りて訓來れハ其義ハ異
あり可○蒼生を古事記ハ昔人草と作れたり昔ハ活
ことハ物の生茂り榮ゆる義を以て云稱あり諸此
ハ草ハ譬へさせ給へる事記傳の説の如ク寶劍出現
章第四一書ハ始五十猛神天降之時多將樹種而下云
遂始自筑紫凡大八洲國之内莫不播殖而成青山焉
と見え神武天皇御紀ハ抑又聞於鹽土老翁曰東有美
地青山四周云々景神行天皇十七年御紀思クニミヤ邦御歌ハ摩
咎波區珥能摩保羅摩多ハ難豆久阿鳥伽鳥枳夜摩許奔

例屢夜摩苔之于漏破試あども有て山の麗ハハハを
愛給ひ出雲神賀詞ハ出雲國乃青垣山内ル下津石根
尔ル宮柱大敷立ル高天原ル千木高知坐須云ニ有也
然々青垣山内を撰びて宮柱定御在ハ坐す由あり其
風土記ハ意宇郡母理郷云ニ所造天下大神大穴持命
云ニ但八雲立出雲國者我静坐國青垣山廻賜而云ニ
有を以て神の御心を明り奉る可ハ其ハ大原郡
天下大天神命詔ハ十神者不置青垣山裏詔而追廢云ニ
有也然々震ハハハ青垣山の内ハ置給ハハハ合せ
考ふ万葉一十九下小置有青垣山山神の奉御詞等云
可ハ有也然々青垣山ハ神氣の盛ハ在る者ありハハ

又藤原宮御井歌ハ日本乃昔香其山者日經乃大御
門尔春山跡之美佐備立有云ニ耳爲之昔管山者皆友
乃大御門尔宜名倍神佐備立有也有て畝火乃此美豆
山者云ハ並べて瑞の對ハ昔云云を以て美たる称
ありを知べりありニ十八ハ昔香生玉藻息津藻ハ有
也玉藻の昔子ハ愛たるあり七十八ハ昔角髪依羅原
ハ昔會曼あり艶の事あり其を天吉葛云故ハ恒
小云係たるあり十九ハ三芳野之真木立山尔昔
生山管之根之有あり如此く殊更ハ昔ハ云々
ハ其活ニシテ生榮ゆる義ハ由れりを知べりあり

七卷旋頭歌小吉山葉茂山邊馬安君と詠るも吉山の
 木葉ハハも茂く榮えたる者ありハハあり草ありも亦右
 の如くあり可キ比登久佐ハ此正書クニノトク小國內人民第二
 事云も更あり一書第六一書クニノトク小國民と見えたるを古事記ハ汝國
 之人草あども作りクニノトク倭寶鏡開始章第三一書ハ日神の
 頃者人雖多請云クニノトクと詔給へるハ其場ハ侍るハ諸神
 の事あり即八十萬神是あり若てハ神と人との差別
 無クガ如くと雖も熟思ふハ其神ハ御在クニノトク坐とも顯
 身あり間ハ現世の人小然とも異り無クハ人云事
 と聞え顯身あり人雖も世を終たるとハ神と云事と
 見えてクニノトク万葉二三十一ハ弓削皇子の薨坐るを久方乃天

宮ハ神隨神等座者と有る是あり又顯身ハ御在
 坐れども皇御孫尊の御上あどもハ其目ハ見え顯ハ九
 給ハぬ神あり勝りて甚く貴く御在クニノトク坐せハ現御神
 とも遠津神とも祢奉りて其神ハ異ありざる御所行
 小ハ惟神又ハ神佐備あども申す常あり然ハ神と
 人との隱身ありと顯身ありとの差有る耳あり事此
 顯見蒼生の義を以て知るとあり神と申す事の由
 下ハ委クニノトクく説るハ如く又瑞珠盟約章あり登天報命
 の所ハ神と人との差別の眞清明ハ見え別るハ件あり
 故ハ其下 諸人云ハ身足と云事あり可クニノトク其身を
 成す所以ハ傳クニノトク十八十三四七十ハ委クニノトクく註せられ今

云限ハ非れども猶祈年祭詞ハ出たるハ神の中ハ
生魂神ハ氣足魂神ハ形玉留魂神ハ神ト此三神の取
其ハ一足ハ一給へる故ハ人身ハ不足ぬ所無く成整
へる者あり事己ハ其講義ハ云々カ如一人を計ふ
ハ一人二人ト云モ一足二足の義ありを合せ考へて
も知る可事ありリ又美を比ト云例ハ御調を
日調ト云々カ如一偕此を人草ト云ハ記傳六
事戸の時の文ハ人死千五百人生也ト有る意あり草の
弥益ニ小生茂リ滋蔓ルカ譬へたる称あり書ト
云々ハ心を着べ一私記ハ古以貴人喻於木云々以賤

ハ云々ト本經注
ハ謂天下監者
蒼蒼然衆多之
兒有ハ又我々青
人草ト云趣ハ似
九事

人喻於草故謂天下人民爲書人草也ト云説ハ僻事ハ
カト有カ如ク嘉称ありを知べ一蒼生の字ハ晋書ハ
纂疏ハ蒼生黔首也ト有を記傳ハ漢上ハ蒼生黔首ハ
ト云意トハ甚ク異カ努力此文字ハ迷ヒて意を取
誤ル事勿ル書紀ハ蒼生ト作れたるハ解ニ似たる称
の文字を取られたる耳ありト云れたるハ實ハ然
言ハあり
○可食而活之也ハ食而活又可伎物也登詔
給比込ト訓べ一偕此保食神の御身より 成出たる
物共を悉クハ天熊人の持參上りて奉れり御個
の事ト蒼蠶の事トを始給へる由ハ下ハ見えたり其
宮材共の此神の御身より成出たり一事を此ハ云々
ねども寶鏡開始章ハ新宮の事見えなれば其も亦此

時小成わらずあらずハ何れの時ハ家を造ル材屋を
昔く草ハ一も成出初たりと爲む旦大殿祭詞ハ先
小ハ屋船命其本草を以て造奉り大殿を祓へてと申せざるを後ハ其木と草との功用を
別て屋船久々遲命是木屋船豊宇氣姬命是梅と有ハ
二柱共ハ此保食神の別御霊あり由傳ハ七下云々
カ如一其新宮の事耳ふが寶劍出現章第四一書ハ
初五十猛神天降之時多將樹種而下云々見
えたるを以てハ頭國ハ立ル本共然ハ此時ハ一も
の大元ハ天より降れざるを知べ一然ハ此時ハ一も
食物著物住宅等と成る可き物寶の全く出來り成具
わハ一時ありければ其三ハ係て悉くハ詔別させ給
いつ可き御事ありを右の大御命ハ一も唯食物の事

を一も詔給へるハ人の命の死活ハ係ハ一も事ハ唯食
物ハ耳預る事ハ一も有ければ其有ハ中ハ最重ハ食
物の事ハ詔給へる此一事を以て其餘の事共ハ及至
へる大御言ハ一も有ければ尊一も高一も云知ぬ
御霊の含フミハ大御命ハあむ有ける故天照皇太神の
大御光を放たせ御在ハ坐て天下を御照ハ給ひ其葦
原中國ハ坐す保食神の御切用を守護ハ御在ハ坐け
るカ此ハ素戔鳴尊の参上ハ來坐るハ就て其御誓ハ
天忍穗耳尊の生出御在ハ坐一ハ其御子を以て天
下を所知ハ令坐奉るセ給ふ可き御幽契の有を以て

今右の顯見養生天
下の人民て天上の神
事記に非か神宮に
神の荒祭神を以て
命給へん大御言ふ天
下四方の人民皆皇
太神宮乃御音也
有と思ふ可

其所知食す顯國の人民を養はせ給ふ可き食物の御
事如此迄深く大御心小係させ給ひて天津日繼を
定のさせ御在り坐りありけり然れば此世中小生と
し活る者何れも天照皇太神の御恩頼り蒙り奉る
ざりけり又此時ハ保食神の御為小荒り御為行共
御在り坐りくども其大神の御徳を見ハ奉り給
へんハ專素戔鳴尊の御功續り申奉り可り程の事
ありて事の極みの甚如此も成整ひ行くあり然ハ云
へ天地を預鑄造りせりけり皇祖天神の御靈あり事
古事記の傳小故是神産巢日御祖命令取茲成種り見

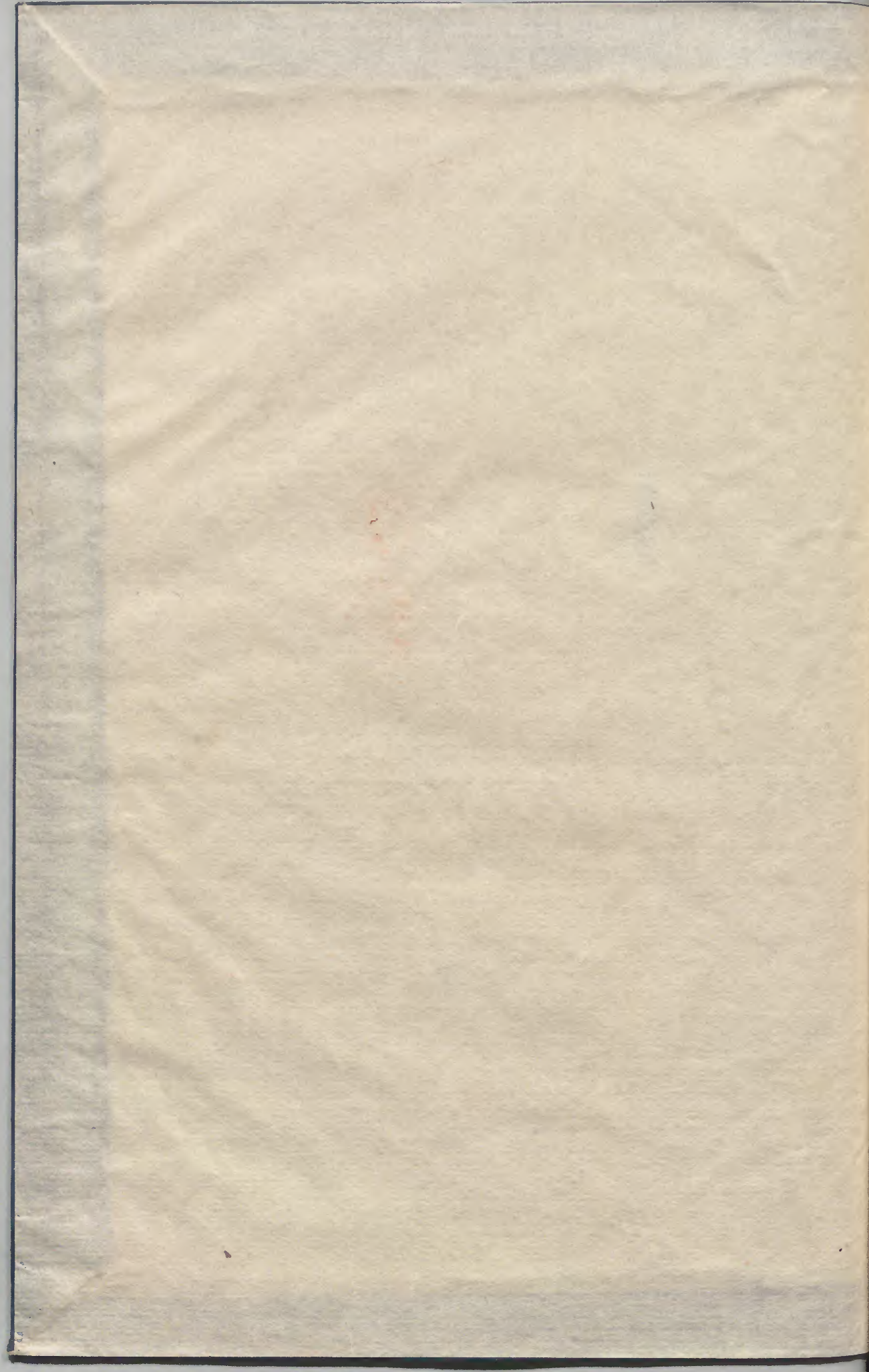
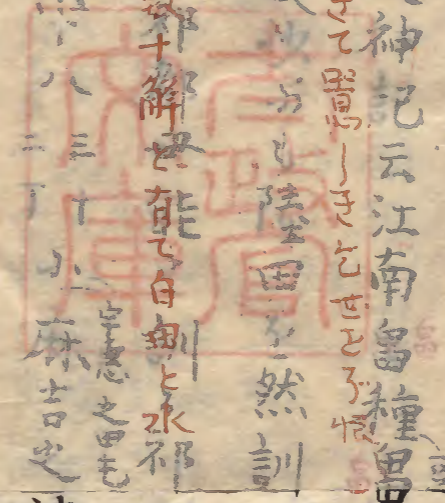
△新六帖ハ光俊
根や入ぬ外山の春
の島つ物葉葉の
ミ出て人の知り
と有て後ぞし云
ニ言ふなり

△天武天皇五年御
紀ハ園と波多
訓せたり

えたるありて辨ふ可りけり 此ハ甚ニ妙あり所ありて
心ちして止ざりあり此正書ハ二神の共議曰吾己生
大八洲國及由河草木何不生天下之主者歟宣ひて
生成り奉り給へる御子等ハ御在り坐せハ皇太神
ハ日神小御在り坐せども此國土を統御せさせ御在
り坐せり由り素戔鳴尊と共ハ成れり者あり又月夜見尊
總導の所知食む御國ハ成れり者あり又月夜見尊
ハ素戔鳴尊同神小御在り 陸田 種子波多郡四能訓
坐す事ハ己ハ註り 見ハの字續後紀ハ陸田ハ乾田也 陸田 陸田 陸田
耕種曰陸田と有り或説ハ陸田ハ乾田也と云ハ然
も有べり和名抄ハ火田漢鈔云也以八太と有る名義
抄ハ膠を波多とも夜伎波太とも有るハ以ハ伎の音
便りて有けり和名抄ハ膠漢鈔云也以八太今按野老
傳云横截山作畠謂之截幡其先燒後謂之燒幡と有り

△拾遺雜春
 打侍物時島燒
 き侍ナけりを見
 云く山島焼
 く男彼見ゆ
 山櫻心して焼け
 と詠
 △と見え新六帖
 折を徒ふ荒る
 園生の島并飽
 けつて有る
 又藍を橋磨
 藍島何時強ち
 の濃淡をく見む
 宇治拾遺十三下
 小島小と作る
 小一うかも得建
 ありそいふ

其ハ万葉二三十一小冬木成春公來者野每著而有火之
 一云冬木成風之共靡如久又四十四立向高圓山尔春
 春野燒火之野燒野火登見左右七三十一小冬隱春乃大野并燒人者
 燒不足香文吾情熾有ふじハ石の燒幡ハ當可
 今も山里入ふハ然爲事少て春の半ハ成て山野
 の枯草を燒盡し諸其地を平して留成物を播殖
 島玉三十一云々陸田陸田を然訓り然れど
 △葦木集小島生小黍食志不進めきて陸田陸田を然訓り然れど
 △有る名義陸田陸田を然訓り然れど
 有化員三十一云々陸田陸田を然訓り然れど
 △晋傳云陸田陸田を然訓り然れど
 田と對三十一云々陸田陸田を然訓り然れど
 △有る波多ハ乾田三十一云々陸田陸田を然訓り然れど
 其ハ土毛三十一云々陸田陸田を然訓り然れど
 其ハ生れ物三十一云々陸田陸田を然訓り然れど



拾遺雜香
打侍時白焼
き侍サケラを見
し云片山の鳥度
く男彼見ゆ
山櫻心して焼
と詠
と見丸新六船
芥を徒ふ花
園生の鳥芥
けふも有る
又煎を播磨
又煎を播磨

其八万葉二
四下小冬木成春
公來者野每著而有火之
一云冬木成風之共靡如久又
四下(立)向高圓山尔春
野燒野火登見左右七
三下小冬隱春乃大野并燒人者
燒不足香文吾情熾
有ふじハ石の燒幡の當可
今も山里入りハ然爲る事りて春の半か成て山野
の枯草を燒盡す諸其地を平らして留り成し物を播殖
是又和名抄小留續搜神記云江南留種留り一曰陸田
和名八大介と存る名義抄り陸田を然訓り然れど
も其小陸田種子を波多郡母能訓り小八衍れる
か如くして其萬葉十三麻吉之波多氣毛
安佐其登尔之保美可禮由若

其八万葉二
四下小冬木成春
公來者野每著而有火之
一云冬木成風之共靡如久又
四下(立)向高圓山尔春
野燒野火登見左右七
三下小冬隱春乃大野并燒人者
燒不足香文吾情熾
有ふじハ石の燒幡の當可
今も山里入りハ然爲る事りて春の半か成て山野
の枯草を燒盡す諸其地を平らして留り成し物を播殖
是又和名抄小留續搜神記云江南留種留り一曰陸田
和名八大介と存る名義抄り陸田を然訓り然れど
も其小陸田種子を波多郡母能訓り小八衍れる
か如くして其萬葉十三麻吉之波多氣毛
安佐其登尔之保美可禮由若

